

宮城県理事・広報副委員長 を拝命して

応用地質（株）執行役員 東北支社長
熊谷 茂一



●はじめに

昨年4月に佐々木和彦（本協会 前広報副委員長）の後任支社長として着任いたしました。その後、昨年5月の定期総会において宮城県理事に選任され、広報委員会の副委員長を拝命いたしました。

昨年は、あの大地震から2年目で復興元年と言われ、我々の業界は大変忙しい年でした。

しかし、この復興需要はいつまでも続くものではありませんし、被災された地域のためには一刻も早い復興が望まれます。したがって、我々の業界が、そして本協会が将来にわたって発展するためには、東日本大震災により地盤の重要性について多くの国民が認識した今、協会活動に真剣に取り組まなくてはいけないと思っています。私は、高橋克実理事・広報委員長をサポートして広報委員会活動がさらに活発化するよう努力する所存です。また、理事として本協会の発展のために微力ではありますが尽力させていただきます。ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

●私のプロジェクトX

ここでは私を知っていただくために、私のこれまでの足取りについて紹介させていただきます。

育成地：北海道小樽市（昭和29年～中学3年生まで）

学生生活：千葉県木更津市（木更津工業高等専門学校 土木工学科）

中学と高専ではバスケットボールで汗を流していた体育会系

社会人生活：1976年4月(株)応用地質調査事務所（現応用地質(株)）入社

第1ステージ：1976年4月～1985年3月

滋賀北陸事務所（滋賀県米原：新幹線停車駅）技術課 勤務

- ◎入社後4年間は、ボーリング調査、土質試験、物理探査、その他各種地盤調査分野、さらに盛土施工管理業務に打ち込んだ。
- ◎5年目以降は地質調査会社においても土木設計業務を行う必要性を感じて土木設計の道に進む。この頃は設計の専門部署はなく、自分で調査し自分で設計するという手作り感満載の設計業務であった。
- ◎設計のジャンルは問わず何でも手掛けた。調査も自分で行った。
 - ・農道舗装設計：CBR試料を採取し、試験をしてその結果で設計した。
 - ・橋梁下部工設計：自分でシンウォールサンプリングさらに土質試験をした。現場ではLLT試験をしてk値を求めた。その結果で杭基礎形式の橋台を設計した。
 - ・軟弱地盤対策工設計：サンプリング、土質試験、サウンディング結果から軟弱地盤解析を行い、その結果に基づき各種ドレーン工法の設計を行った。

-
- ・地すべり対策工設計：地質調査、変位観測を行い、その結果から地すべり解析を行い、引き続き地すべり対策工の設計（水抜き工、集水井工、擁壁工）を行った。その後幸いにも施工管理まで行った。
 - ・急傾斜地対策工設計：現場踏査、ボーリング調査を行い擁壁工とグラウンドアンカー工（当時はアースアンカー工と呼んだ）の設計を行った。
 - ・大型砂防ダム設計：基礎部に弱層が分布しており基礎処理が必要であり、かつ簡易水道用水の供給をも兼ねていたため水密性も求められた。初めての砂防ダム設計でいきなりハイレベルな技術が要求された。（手軽なPCが欲しかった）

第2ステージ：1985年4月～1987年3月

東京事業本部 設計部 勤務

◎××港前湾港区の共同設計の技術合作業務

外堀がすっかり埋められてからのある日、上司から中国へ行って来いと言われて、広島あたりに行くのかと勘違いしていた。

中国のとある港湾施設全体の設計を中国技術者と日本技術者が一緒に行うもの。日本側では機械屋、電機屋、建築屋、土木屋、そして土質屋の私でプロジェクトチームを編成した。私の分担は「軟弱地盤の処理」で、仕様書には「軟弱地盤を施工上の要請に対し最も経済的な工法で処理する」とあった。約2年間これに従事した。当時一番頭を悩ませたのが、中国側から提供された土質試験データである。データに納得が行かないので中国側の設計技術者に確認しても、中国では現場、試験、設計は完全に分業化されていて、全く分からない始末だった。仕方ないので、ボーリング現場を見学させてくれるよう要請して現場に行ってみると、木の葉のように揺れる伝馬船からガス管の叩き込みでサンプリングをしていた。絶句。

しかし、中国側の技術者は大変熱心に日本の技術を勉強していたので、このころから近い内に我々と同等の技術を保有することは予感できた。

第3ステージ：1987年4月～1999年3月

札幌支社 技術部 勤務（設計課長）

◎「調査と設計の融合」を目指して悪戦苦闘の毎日を過ごした。生まれ故郷にもかかわらず「泥炭」との出会いで、自分の見識の低さに落ち込んだ。組織の長を任せられ、何でも自分でやれる楽しみを取り上げられた。

- ・パイルネット工法：松丸太を使った軟弱地盤工法の設計を行った。

北海道らしい工法でザックリしているが、泥炭地盤にはよく効いた。

それならと思い、丸太を格子状に組み「筏（イカダ）工法」と自分で名付けた工法は見事に失敗で、朝現場に行ってみると重機が亀のようにひっくり返っていた。剛性の違いで泥炭とは馴染みが悪かった。

- ・北海道で初めての直轄地すべり対策事業（貯水池）3件に関わった。
現場踏査はヒグマとダニの恐怖との戦いだった。しかし、ここで地すべり対策工の全ての設計法をマスターした。
- ・軟弱地盤上の柔構造・柔支持樋門の設計
（平成4年度技術活用パイロット事業）
それまで試験施工は実施され、設計の手引き（案）も出されていたが、40cmもの上げ越しをする軟弱地盤上の本格的な実施工は本邦初だった。実施工であるので失敗は許されない。例によってこの時ばかりは調査や試験も自分で関わり悪戦苦闘して設計まで行い、さらに施工にも計測管理をしながら立ち合った。結果は理論と実際がほぼ一致することが確認できた。後年これら実施工のデータを吟味して正式なマニュアルが作られた。これから15年程後に、若い技術者に「今の時代はこのように設計するんだ」と柔構造樋門の設計法を説明された。黙って聞いた。
- ・ふるさとの川モデル事業
全国でふるさとの川モデル事業が盛んに行われた。子供のころ近くの川で遊んだ記憶を基に設計ができたので楽しかった。手掛けた現場の竣工から10年後の景観が地域に溶け込んで、地域住民の憩いの場になっているとのことで、2006年度土木学会デザイン賞をいただいた。

第4ステージ：1999年4月～2008年3月

東北支社（仙台市）勤務（技術部長・副支社長）

- ◎豪雨災害、融雪災害、地震災害の頻発で東北6県を飛び回った。
初めての単身赴任生活で自分の人生を見つめ直すことができた。
組織マネジメントを本格的に行い、経営にも首を突っ込み始めた。

第5ステージ：2008年4月～2012年3月

中部支社（名古屋市）勤務（支社長）

- ◎結果を出すために苦悩した。
中部支社は民間顧客が多く、お客様からの信頼が自分たちの糧であることを痛いほど味わった。満足度を上げられない成果を出すと即退場の世界にしびれた。民間顧客へは、自分が長年築き上げてきた調査と設計の融合など必要ななかった。仕事を手に入れる難しさを叩き込まれた。

.....

◎自分が10年間お世話になった東北で大震災が発生した。

自分が設計した道路や堤防、構造物が破壊されたり、跡形もなくなった光景を報道で見て涙が止まらなかった。でも自分にはどうすることもできなかった。悔しかった。

第6ステージ：2012年4月～

東北支社 勤務（支社長）

◎東北復帰。

思いが天に通じたのか、震災後の東北復興に直接携われることになった。名古屋でのもどかしい気持ちが晴れた。しかし、感傷に浸っている暇もなく、一気に入ってくる仕事に圧倒される毎日だ。職員や協力会社職員の健康状態のチェックに細心の注意を払った。さらに、一年中通して年度末の繁忙期状態で、安全管理や品質管理に気が抜けない毎日である。技術屋の時に燃えていた「調査と設計の融合」には全く手が付いていない。

ただ、職員の半分以上が4年前と一緒に働いた仲間なので、気心が知れていてやりやすい。

●おわりに

長々と私の足取りを書かせていただきましたが、今振り返ってみてもやはり私はこの業界で育てられてきたのだとの思いを深くしております。定年も間近になりましたが、ここ東北の震災復興、そして協会活動を通じてお客様や一般市民に災害から逃れたり、被害を軽減するためには、地盤状況を知ることが重要であることをお伝えすることに微力ながら尽力したいと思います。さらに、私のこれまでの経験をもとに、我々の業界に籍を置く若い世代に、我々が社会貢献できる職種は地質調査だけではなく、地質調査屋だけにしかできない（地質調査屋がやった方が良い）ジオデザインの分野があることを伝えて行きたいと思えます。